

受験番号

平成30年度 一般選抜 I 期 入学試験問題

現代文 (50分)

注意事項

1. 「始め」の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は全部で7ページです。印刷不鮮明などの箇所があった場合は申し出てください。
3. 答えは解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 使用する問題用紙と解答用紙の指定欄に**受験番号** (数字) を必ず記入してください。
5. 解答作業には必ず**黒の鉛筆** (HB以上) または**シャープペンシル**を使用し、ボールペンや色鉛筆などを使ってはいけません。
6. 試験終了後に、解答用紙、次に**問題冊子**を回収します。問題冊子の余白や裏面は、**下書き**に使用してもかまいません。
解答用紙は破ったり、汚したりしないでください。
7. 「やめ」の合図で、すぐに筆記用具を置き、静かに待っててください。

次の文中の、「カタカナ」を漢字に書き取り、「漢字」をひらがなに読み取りなさい。

- (1) イリヨウ^①においては、カンジャ^②のジンケン^③をソンチヨウ^④することがヒツス^⑤のヨウケン^⑥である。
- (2) リッポウ^⑦はコツカイ^⑧が、ギョウセイ^⑨はナイカク^⑩が、シホウ^⑪はサイバンシヨ^⑫がタントウ^⑬している。
- (3) イギリスにおけるサンギョウ^⑭カクメイ^⑮が、キンダイ^⑯の黎明^⑰をつげた。
- (4) 功德^⑱をつむ。
- (5) ボウリョク^⑲は言語道断^⑳である。

二

次の3つの選択肢の中から、どれか1つを選んで解答しなさい。

選択肢1

和歌を1つ、あるいは短詩を1つ、どちらかを作りなさい。題・内容は自由でよい。
和歌は三十一文字を原則とし（字余り・字足らずは1字まで）、解説も付しなさい。
詩は8行以上の長さで、解答欄の枠内に収まるように書くこと。
ただし、和歌も詩も、古典文語調ではなく現代口語調で作ること。

選択肢2

これまでの人生で読んだ本・書物の中で、感銘を受けたものについて、作品名、あるいは作家名を明記した上で、感想文を書きなさい。
文の長さは、解答欄の枠内に収まるように書くこと。

選択肢3

聖徳太子が十七条憲法において「和を以つて貴しとなす」と述べて以来、「和」は日本人の主要徳目の1つであった。
「和」の精神が、日本人の作る組織・社会にもたらした長所、及び短所について、論じなさい。
文の長さは、解答欄の枠内に収まるように書くこと。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この文章は漱石の『三四郎』の一節である。明治四十年ころ、熊本の旧制高等学校を卒業した三四郎が旧制大学へ入学するために上京する列車の中の場面である。なお、文中に出てくる「子規」とは正岡子規のことである。

三四郎は急に気をかえて別の世界のことを思い出した。これから東京に行く。大学にはいる。有名な学者に接触する。趣味品性の備わった学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母がうれしがる。というような未来をだらしなく考えて、大いに元気を回復してみると、べつに^①二十三ページのなかに顔を埋めている必要がなくなった。そこでひょいと頭を上げた。すると筋向こうにいたさつきの男がまた三四郎の方を見ていた。今度は三四郎のほうでもこの男を見返した。

髭を濃くはやしている、面長のやせぎすの、どことなく神主じみた男であった、ただ鼻筋がまっすぐに通っているところだけが西洋らしい。学校教育を受けつつある三四郎はこんな男を見るときつと^②教師にしてしまう。男は白地の^{かすり}緋の下に、丁寧に白い襦袢を重ねて、^a紺足袋をはいていた。この服装からおして、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えている自分からみると、なんだかくだらなく感ぜられる。男はもう四十だろう。これよりさきもう発展しそうにもない。

男はしきりに煙草をふかしている。長い煙を鼻の穴から吹き出して、腕組をしたところはたいへん悠長にみえる。そうかと思うとむやみに便所か何かに立つ。立つ時にうんと伸びをすることがある。さも退屈そうである。隣に乗り合わせた人が、新聞の読みがらをそばに置くの借りてみる気も出さない。三四郎はおのずから妙になつて、ベーコンの論文集を伏せてしまった。ほかの小説でも出して、本気に読んでみようとも考えたが、面倒だからやめた。それよりは前にいる人の新聞を借りたくなった。あいにく前の人はぐうぐう寝ている。三四郎は手を延ばして新聞に手をかけながら、わざと「おあきですか」と髭のある男に聞いた。男は平気な顔で「あいてるでしょう、お読みなさい」と言った。新聞を手を取った^③三四郎のほうはかえって平気ではなかった。

あけてみると新聞はべつに見えるほどの事ものっていない。一、二分で通読してしまった。^bリチギに畳んでもとの場所へ返しながら、ちよつと^c会釈すると、向こうでも軽く挨拶をして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

三四郎は、かぶっている古帽子の徽章の痕が、この男の目に映ったのをうれしく感じた。

「ええ」と答えた。

「東京の？」と聞き返した時、はじめて、

「いえ、熊本です。……しかし……」と言ったなり黙ってしまった。大学生だと言いたかったけれども、言うほどの必要がないからと思って遠慮した。相手も「はあ、そう」と言ったなり煙草を吹かしている。なぜ熊本の生徒が今ごろ東京へ行くんだともなんとも聞いてくれない。熊本の生徒には興味がないらしい。この時三四郎の前に寝ていた男が「うん、なるほど」と言った。それでいてたしかに寝ている。ひとりごとでもなんでもない。髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑った。三四郎はそれを④しおに、「あなたはどちらへ」と聞いた。

「東京」とゆつくり言ったぎりである。なんだか中学校の先生らしくなくなってきた。けれども三等へ乗っているくらいだからいたしたものではないことは明らかである。三四郎はそれで談話を切り上げた。髭のある男は腕組をしたまま、時々下駄の前歯で、拍子を取って、床を鳴らしたりしている。よほど退屈にみえる。しかしこの男の退屈は話したがらない退屈である。

汽車が豊橋へ着いた時、寝ていた男がむっくり起きて目をこすりながら降りて行った。よくあんなにつごうよく目をさますことができるものかと思つた。ことによると寝ぼけて停車場を間違えたんだらうと氣遣いながら、窓からながめていると、けつしてそうでない。無事に改札場を通過して、正氣の人間のように出て行つた。三四郎は安心して席を向こう側へ移した。これで髭のある人と隣り合わせになつた。髭のある人は入れ代つて、窓から首を出して、水蜜桃を買っている。

やがて二人のあいだに果物を置いて、

「食べませんか」と言つた。

三四郎は礼を言つて、一つ食べた。髭のある人は好きとみえて、むやみに食べた。三四郎にもつと食べろと言ふ。三四郎はまた一つ食べた。二人が水蜜桃を食べているうちにだいぶ親密になつていろいろな話を始めた。

その男の説によると、桃は果物のうちでいちばん仙人めいている。なんだか馬鹿みたような味がする。第一核子の格好が無器用だ。かつ穴だらけでたいへんおもしろくできあがつていると言ふ。三四郎ははじめて聞く説だが、ずいぶんつまらないことを言う人だと思つた。

次にその男がこんなことを言いだした。子規は果物がたいへん好きだった。かついくらでも食べる男だった。ある時大きな樽柿を十六食つたことがある。それでなんともなかった。自分などはとても子規のまねはできない。三四郎は笑って聞いていた。けれども子規の話だけには興味があるような気がした。もう少し子規のことも話そうかと思っていると、

「どうも好きなものにはしぜんと手が出るものでね。しかたがない。豚などは手が出ない代りに鼻が出る。豚をね、縛って動けないようにしておいて、その鼻の先へ、ごちそうを並べて置くと、動けないものだから、鼻の先がだんだん延びてくるそうだ。ごちそうに届くまでは延びるそうです。どうも一念ほど恐ろしいものはない」と言つて、にやにや笑っている。まじめだか冗談だか、判然と区別しにくいような話し方である。

「まあお互いに豚でなくつてしあわせだ。そう欲しいものの方へむやみに鼻が延びていったら、今ごろは汽車にも乗れないくらい長くなつて困るに違いない」

三四郎は吹き出した。けれども相手は存外静かである。

「じつさいあぶない。レオナルド・ダ・ヴィンチという人は桃の幹に砒石を注射してね、その実へも毒が回るものだろうか、どうだろうかという試験をしたことがある。ところがその桃を食つて死んだ人がある。あぶない。気をつけないとあぶない」と言いながら、さんざん食いちらした水蜜桃の核子やら皮やらを、ひとまとめに新聞にくるんで、窓の外へなげ出した。

今度は三四郎も笑う気が起こらなかつた。レオナルド・ダ・ヴィンチという名を聞いて少しく辟易したうえに、妙に不愉快になつたから、^eツツシんで黙つてしまった。けれども相手はそんなことにいつこう気がつかないらしい。やがて、

「東京はどこへ」と聞きだした。

「じつはじめてで様子がよくわからないのですが……さしあたり国の寄宿舎へでも行こうかと思つています」と言う。

「じゃ熊本はもう……」

「今度卒業したのです」

「はあ、そりゃ」と言つたがおめでたいとも結構だともつけなかつた。ただ「するとこれから大学へはいるのですね」といかにも平凡であるかのごとく聞いた。

三四郎はいささか物足りなかった。その代わり、

「ええ」という二字で挨拶を片づけた。

「科は？」とまた聞かれる。

「一部です」

「法科ですか」

「いいえ文科です」

「はあ、そりゃ」とまた言った。三四郎はこのはあ、そりゃを聞くたびに妙になる。向こうが大いに偉いか、大いに人を踏み倒しているか、そうでなければ大学にまったく縁故も同情もない男に違いない。しかし、^⑤そのうちのどつちだか見当がつかないので、この男に対する態度もきわめて不明瞭であった。

(注) ○ 砒石：砒素・硫黄・鉄からなる鉱物。猛毒

問一 傍線部①について。二十三ページとは何の二十三ページのことか。文中から抜き出しなさい。

問二 傍線部②について。「教師にしてしまう」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の師匠になつてもらおうとする。

イ つまらない存在だと切り捨ててしまう。

ウ すぐ怒られそうなので、なるべく関わりにならないようにする。

エ 親しく話しかけて、相談相手になつてもらおうとする。

オ 教養のある人間だと感じて、何となく緊張してしまう。

問三 傍線部 a のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問四 傍線部 ③について。かえって平気でなかったのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 本当の所有者の許しを得ずに行っている行動であることに加えて、髭のある男を妙に思う気持ちが増したから。

イ 髭のある男が許可しないかもしれないと思っていたのに、あっさり許可を得ることができたから。

ウ 髭のある男の反応を試してみるために故意に聞いてみたのに、軽くあしらわれて心中穏やかでなかったから。

エ 所有者の男が目覚めたとき、勝手に許可を与えた男の間に争いが起こるかもしれないと不安になったから。

オ 髭のある男の平然とした態度をみて、何を考えているかわからず、この男に対する警戒感が生じたから。

問五 傍線部 ④「しお」の意味として適切なものを次の語群の中から選びなさい。

語群・救い、手段、言い訳、機会

問六 傍線部 ⑤「そのうちのどつちだか」とはどういうことか。次の説明の中から、適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大学生をうらやましいと思っているのか、それとも大学生をかわいそうだと思っているのか。

イ 大学生を見下すほど自分を偉いと思っているのか、それとも大学生に劣等感を持っているのか。

ウ 大学生を偉いものだと思っているのか、それとも大学生を小馬鹿にしているのか。

エ 大学生を法科と文科で差をつけて見ているのか。それとも両者の違いに大して興味がないのか。

オ 大学生を別に大したものだと思っていないのか、それとも大学自体に関心を持っていないのか。

問七 夏目漱石の作品を次の語群の中から、二つ選びなさい。

語群・羅生門　　こころ　　舞姫　　暗夜行路　　それから　　山月記